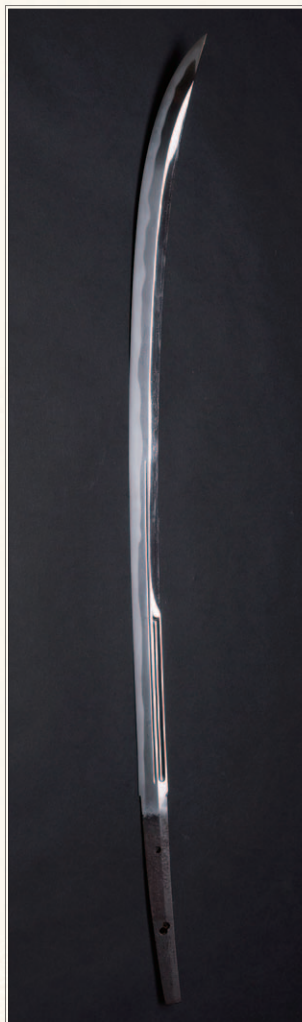


伝山本覚馬所用長卷



2013年に放映されたNHK大河ドラマ「八重の桜」で、脚光を浴びた人物のひとりが山本覚馬である。しかし、覚馬は全国においては言うまでもなく、京都、さらには同志社においても、その知名度はきわめて低いと言わざるをえなかった。また、その名前を知っていたとしても、覚馬の事跡を詳しく知る人々は決して多くはなかったのではないだろうか。

このたび「八重の桜」で演じられた覚馬は、多くの視聴者の目には新鮮に映ったかもしれない。覚馬は、特に京都に関しては、明治初期の京都の近代化、あるいは政官財界で大きな功績を残した人物として描かれた。実際に、薩摩藩邸幽閉時に口述筆記させた意見書『山本覚馬建白』（通称『管見』同志社大学図書館蔵）や、青山霞村『山本覚馬伝』を読めば、覚馬が残した足跡の一端を窺うことができる。明治初期、東京奠都（てんと）の影響で衰退していく京都を復興・近代化させていく上で、覚馬の指導者的役割が不可欠な力であったことは事実である。

ところが、覚馬に関する資料は、その活躍とは比例せず、公文書を除けば、ごくわずかで、その他の資料の所在はわかっていない。同志社においても、覚馬に関する資料はごくわずかしが残っており、さらに覚馬の直筆と確認できる資料は今のところ同志社には存在しない。これは、覚馬

が盲目であったことに起因すると考えられるが、新島襄などと比べてこれまで積極的に資料の収集を行ってこなかったことも一因であろう。ともあれ、覚馬にまつわる資料収集は今後取り組みねばならない課題となっている。

それでは現在残された関連資料はと数と数は少ない。そのうちの1点が今回紹介する長巻である。現在当センタ―には6振の刀が収蔵されており、そのうちの1振が本資料に該当する。銘表に「左」、銘裏に「筑州住」とあることから、鎌倉時代末期から南北朝時代に筑前に住んでいた刀工・左文字の一族の作と考えられる。他にも表に「文禄四年乙未年八月吉日」「斉藤伊豆入道所持」、裏面に「長巻摺上セル」「獻加藤清正公江帯」とある。これらの情報から、1595年8月に作成された長巻で、斉藤宗利（1567～1647）が所持していたこと、そして、茎を短くし、加藤清正に渡したものであることがわかる。このような由緒と価値を持つ長巻の持ち主を調べる中で、今では一つの仮説として、かつて武術、特に槍術に優れた覚馬の所有物であったのではないかとされている。もし仮説どおりであれば、この資料は若かりしころの覚馬の威容を今に伝える資料と言えるかもしれない。

（同志社社史資料センター）